

# シャブタイ派思想の靈魂転生論

## ——蛇の穢れとメシアの靈魂の系譜

山本 伸一

### 1. 序論

本論考では、17 世紀中葉に未曾有の規模でユダヤ人共同体にメシア待望論を喚起したシャブタイ派思想の靈魂<sup>ギルグール</sup>転生論を論じる。メシアを自称したシャブタイ・ツヴィ（1626-1676）は生来のカリスマで人々を引きつけ、死後も崇拜と非難の対象であり続けた人物である。彼の名を冠して呼ばれるシャブタイ派のメシア運動は、1665 年のメシア宣言を機に、広くヨーロッパや中東でユダヤ人の心に期待と疑念を引き起こした。ツヴィはこの運動の中心に位置する存在であった。その一方で、預言者としてメシア運動のプロパガンダを担い、カバラーの言説によってシャブタイ派思想の根幹を構築したガザのナタン（1643-1680）を見逃すことはできない。ナタンはツヴィのメシアとしての使命と正統性を保証し、間近に迫った贖いに備えて人々に改悛と贖罪を促した。これから論じる靈魂転生論は、一般的にカバラーの伝統のなかで語られる教義であるが、シャブタイ派思想のなかではとりわけ彼の思弁的貢献によって練り上げられたものである。

ナタンのメシア論を支えたカバラーのなかで、イスラエルの歴史は罪業の系譜として語られると言っても過言ではない。カバラーにはユダヤ教に固有の内罰的な精神が流れ込み、人間の罪は単に身体によって犯される過失ではなく、靈魂が負った傷であると解釈される伝統が存在した。エデンの園で

善悪の知識の樹の実を食べた<sup>アダム・リション</sup>最初の人間に由来する人類の靈魂は、さらにこの世界で様々な罪を犯しながら、身体の死を越えて移ろいゆく。こうした靈魂転生論は、早くも13世紀にヘローナ・プロヴァンス盛期のカバラーのなかで、ナフマニデスらによって深甚なる秘密として暗示的に取り上げられた。その後、徐々に体系化が進み、16世紀のツファットでイツハク・ルーリア(1534-1572)を祖として興隆したカバラーの靈魂転生論は、より明確な意図のもとに地上に散逸した靈魂の<sup>ティククーン</sup>修復を重視するようになる。転生を繰り返す靈魂を天上の本来の場所に返すためには、戒律遵守を通して罪業を修復する必要がある。この時代、世界創造の奥義に通暁するカバリストは、原初の調和の回復を目指してテウルギアを駆使する修復者であるだけでなく、人々に適切な戒律を指導する魂の治癒者でもあった。

靈魂をめぐるこうした発想は、カバラーの思想的枠組みを超えて同時代のユダヤ人の生命観に大きな影響を及ぼした。とりわけ、17世紀のアムステルダムで盛んに議論されたマラーノの救済に関する問題は、靈魂転生論が当時の人々の強い関心を集めたことを物語っている。マラーノと呼ばれるキリスト教への改宗を強いられたユダヤ人の多くは、1492年のスペイン追放によって北部ネーデルランドに移住した。彼らの子孫にはこの地でユダヤ教に戻る者もいたが、一度棄教したユダヤ人が救済に値する存在であるか、あるいはユダヤ人として生まれたことが救済の条件となるのかという問題は数々の論争の火種となったのである。そして、のちに東欧を中心に発展するハシディズムでは、靈魂転生論がさらに一般化し、人々の生命観を規定するようになる。本来はカバリストに託されていた靈魂の修復が、ひとりひとりの人間の戒律遵守と善行に依存していると説かれ、彼らの生活を規定する極めて重要な前提となったのである。

それに対して、ルーリア派のカバラーを継承したナタンの靈魂転生論では、靈魂に関するユダヤ人の生命観よりもツヴィのメシアの靈魂が前面に押し出されている。確かに1665年に彼が著した改悛のための<sup>ティククニーム</sup>「修復」と呼ばれる文書は、メシアの時代に備えて人々が行うべき戒律遵守と懺悔の祈禱を流布させるために書かれたものであり、靈魂の修復をめぐる敬虔主義の教えが

それまでに例を見ないほど多くの人々に向けられた。ところが、ナタンが自らのメシア論を展開する際に著した論考では、救済におけるシャブタイ派信者の優位性が先行し、もっぱらメシアの靈魂の特権性が議論の中心となっている。これは当時始まった靈魂転生論の大衆化とも呼びうる現象とは対極的な傾向である。

本論考では、1665 年にナタンが著した『大蛇論』<sup>クニニーム</sup>を主要な資料として、メシアの靈魂をめぐる靈魂転生論の詳細を明らかにする。この論考を取り上げる理由はふたつある。ひとつは主題の特異性である。先に言及した改悛のための「修復」に比べれば、『大蛇論』はカバラーの専門的な知識を要求することから、一般の人々に向けられた祈祷や瞑想の指南書でないことは明らかであり、ツヴィと信者の優越を証明するための解釈が展開されている。これを皮切りにナタンはこの種のカバラー論考をいくつか著しているが、メシアの靈魂の特質を記述したものとしては『大蛇論』が際立っている。それに加えて、もうひとつの理由は逆説的なメシア論の重要性である。1666 年、熱狂に包まれた故郷スミルナのユダヤ人共同体でメシアとして強権を振るっていたツヴィは、王位篡奪を目論んで、ときのスルタン、メフメト 4 世に会見を申し出ようとコンスタンティノープルに向かった。しかし、目的を果たすことなく途中で捕縛されてしまう。このあと彼は改宗を迫られ、ユダヤ教を捨ててムスリムになったと伝えられている。当時の彼の意図を明確に伝える信頼性の高い資料は現存しないが、『大蛇論』の靈魂転生論にはまさにこの出来事を予見するような記述が見られるのである。メシア棄教という衝撃的な出来事は人々の失望と運動の消沈をもたらした。中核をなす信者の多くはそこに隠された必然性を見出そうとしたが、ナタンはそれよりも前に、すでにツヴィの精神状態に棄教と改宗の危うさを見出していた可能性がある。

『大蛇論』のなかで、ナタンは現実のツヴィの言動についてほとんど何も語らず、メシアの靈魂神話を通して贖い主の地位を継承するツヴィの正統性を論じている。メシアの靈魂について我々はふたつの側面を取り上げることになる。ひとつは、善悪の境界を超脱するメシアの靈魂の両義性である。ユ

ダヤ思想のなかのメシアの位置づけが必ずしも確固たるものでなく、善悪の両義性によって特徴づけられるという逆説は、とりわけカバラーの思想的伝統のなかで提示されてきた。ナタンが『大蛇論』で描くメシアの靈魂は、邪悪な大蛇と戦う「聖なる大蛇」であるが、同じく悪の権化であるファラオを制圧すると自らがファラオとなることが明らかにされる。こうしたメシア像はツヴィの双極的な人格と結びついている。当時の資料は、ツヴィが高揚して冒瀆的な奇行に及び、抑鬱状態にあるときには、彼は自らの背徳を悔いて祈りの生活に戻っていったことを伝える。ナタンはこの二重の心理状態を悪と格闘するメシアの靈魂の様相として語ったのである。

もうひとつの側面は、ツヴィが伝統的な靈魂転生論に現れるメシアの靈魂を継承していることを主張するためのアポロギアである。靈魂転生はすべての被造物に生命を付与する原理であるが、ルーリア派のカバラーでは、メシアの靈魂が特殊な系譜に連なっていると考えられた。ナタンはメシアの靈魂転生の系譜にツヴィを加えることで正統性を論証し、さらには信者とツヴィが「メシアの踵の靈魂」と呼ばれる特殊な靈魂を共有していると説いた。最初の人間の最下部である踵に由来する靈魂を修復することが最も困難であると考えられていたことを踏まえて、彼は修復されるべき最後の靈魂が終末の贖いを担うと主張したのである。

シャブタイ派運動のモノグラフのなかで、ゲルショム・ショーレムがツヴィの靈魂についてある程度の解説を加えたが、これまでメシアの靈魂や靈魂転生論についてのまとまった研究は発表されていない。本論考では、ルーリア派のカバラーを代表するハイム・ヴィタル（1543-1620）の著作を比較項としながら、ナタンの教義を立体的に描き出すことを目指す。『靈魂転生の書』や『靈魂転生の門』など、その際資料として用いるヴィタルの著作には、ナタンが語る靈魂転生論の論拠を発見することができる。彼の言葉には独創よりも模倣が多いと言えるかもしれないが、ツヴィの精神的な特異性に既存の言説を巧みに適用し、メシアとしての正統性を証明してみせた創意が重要な思想的基盤となったことは間違いない。

## 2. 善悪の境界を超脱するメシアの靈魂の両義性

ガザのナタンがメシア棄教の直前に著した『大蛇論』<sup>タニニーム</sup>は、その題目が示すように、蛇とメシアの靈魂の関係をカバラーの創造論のなかで明らかにした論考である。まず、我々はすでにこの時点で、メシアが善悪の境界によって規定されない存在であると主張する棄教後のメシア論の前兆を目の当たりにする。エデンの園の原罪以来、ユダヤ文学で悪の表象として描かれる蛇は、カバリストが悪に与えた外殻<sup>クリッパー</sup>という呼称のほかにも、ここでは大蛇、ファラオ、ゴーレムなどと呼ばれる。カバラーの世界観では、創世記の物語を創造の過程の皮相的表現にすぎないとする。ナタンは悪の要素が滞留するこの世界の起源を説明するために、ルーリア派のカバラーの基本理念を踏襲しながら、創造以前に原初の空間を満たしていた無限<sup>エーン・ソフ</sup>と呼ばれる神的存在には、そもそも創造を展開するための場所がなかったという状況を説明することから始める。それを確保するために、無限は自らのうちに収縮して創造のための場所を作り出し、同心円状に「玉葱の鱗葉」のような10個の層構造が展開した。多くの場合、神の属性を表す10個のスフィロートとして描写される体系である。我々にとって重要な清浄空間<sup>テヒール</sup>と呼ばれる場所は、その最外周、すなわち神の力が最も希薄になる円形の外側に位置する。同時に、ここは「大いなる深淵」や外殻とも呼ばれ、悪の要素が占める場所と同定される。グノーシス的な創造神が中心部からこの領域にまで聖性を波及させることはできない。ところが、驚くべきことに、メシアの靈魂の源泉は聖性の高い中心部ではなく、この「大いなる深淵」にあることが明らかにされる。

律法では彼「シャブタイ・ツヴィ」について「神の靈が水面を漂っている<sup>4</sup>」と言われていた。さらに次のように言われている。「これがメシア王の靈である<sup>5</sup>」。確かに、「神が漂っている」は彼の呼び名と同じ数値である<sup>6</sup>。その靈魂が大いなる深淵にあって、「母胎から出てくるかのように現れるときには<sup>7</sup>」雲と霧の闇がその周りを取り巻いて、霧が彼を包んでいる<sup>8</sup>ということを知っておかねばならない。

ナタンの<sup>9</sup>数秘術によれば、創世記で「神の靈」と呼ばれていた浮遊体こそが、実は「メシア王の靈」であり、それは創造の原初以来、悪が瀰漫する「大いなる深淵」に存在していたのである。「メシア王の靈」は、それでも悪を野放しにしているわけではない。蛇に喩えられる悪魔サマエルはメシアによって切り殺され、深淵に混在する善が選り分けられる。

この深淵のなかには、サマエルとその妻がいる。この秘密については「深淵の表面に闇があった<sup>9</sup>」と書かれているが、そこにはメシアの靈もあった。深淵とは水のことである。「主は堅強な剣をもって、逃れようとする蛇のレヴィヤタンとその妻である曲がりくねった蛇、すなわち盲目の大蛇を罰する<sup>10</sup>」という聖句が成就するように、彼は清浄空間を選り分ける。

ツヴィの身体に宿る前から、メシアの靈魂はこうして「大いなる深淵」で悪と格闘していたとされる。

だが、常に彼らを制圧できていたわけではない。善と悪を選り分けることさえできるメシアの靈魂は、生得的に贖いを主導する能力を備えているが、ヨブに喩えて懊悩する義人としても描かれる。現実のツヴィがイスラームを奉じるオスマン帝国に生まれたことを、あるいはしばしば悪魔の幻惑を伴う憂鬱気質にさいなまれていたことを、ナタンは次のような表現で書き表している。タルムードのヨブ伝承に依拠して、ここで深淵に沈潜するメシアの靈魂が「ファラオの僕」と呼ばれている事実は極めて重要である。

ヨブはメシア王であった。これについては、次のように言われている。「ヨブはファラオの僕のひとりであった<sup>11</sup>」。別の言葉では、「主の言葉を畏れる者はファラオの僕のなか<sup>12</sup>にいる」と言われている。これはすでに述べた（メシアの）靈魂が外殻の間に沈み込んでいたということである。いつの世代でもいくつかの閃光がそこから出ていき、もし彼ら「イスラエルの民」<sup>13</sup>がふさわしければ、その閃光は主の崇拝に勤しんでいたはず

であった。それがメシア王であり、彼は外殻から靈魂のすべての根源を引き出していたことであろう。我らが主「ツヴィ」もまた生を受けて（初めて）現れたわけではなく、外殻に由来する靈魂のひとつの閃光であった。彼がすべての根源を引き出すと、その後で主が大いなる試みを彼にもたらす。何度か高みに上ったあとで、彼は大きい深淵に落ちるのである。すると、蛇たちが彼をだまして「お前の神はどこにいるのか」と、実のところは知恵もないのに大きい証を聞き出そうとして、彼を苦しめるのである。<sup>14</sup>

ヨブが神の許可のもとでサタンによって数々の災いを被らねばならなかったのは、それが悪の間に身を置かねばならないメシアの靈魂の運命だったからである。ツヴィの精神の起伏も同じ原因によって説明される。外殻に勝利し「高みに上がった」ときは、高揚して威厳をもって振る舞い、再び「大きい深淵に落ちる」ときには陰鬱に沈む。しかし、贖いに値しなかったヨブの世代とは異なり、人々は悔い改めてメシアの来臨を待ち望んでいる。ツヴィの身体に宿ったメシアの靈魂は起伏を伴いつつも、世界を贖いに導こうとしていることは確かなのである。

このとき、それまでになかった革新的な出来事が起こる。ヨブ以来、「ファラオの僕」と呼ばれる運命にあったメシアの靈魂が、戦いのなかで優位に立ち、完全に悪を破壊するのである。メシアの両義性はまさにこの事態において発揮される。ナタンは、他でもないメシアこそがファラオ、あるいは「大きい蛇」と呼ばれることを明らかにする。

彼は信仰によって立っている。この他にも、すべての身体の部位で辛苦を味わっており、これらの試みのためにヨブと呼ばれ、ファラオの僕と呼ばれるのである。ファラオはメシア王の真実の名であり、破壊という言葉は「アーロンが破壊した」の秘密である。<sup>15</sup> 彼によって外殻に由来する無割礼者は完全に破壊されるという意味である。これを成し遂げると、ファラオと呼ばれるようになる。もはやヨブとは呼ばれることはな

く、ファラオと呼ばれるのである。[……] ファラオは大いなる大蛇と呼ばれ、エジプトのナイル川に潜んでいた。[……] それゆえ、彼は大いなる大蛇のファラオと呼ばれ、メシア王とは反対のエジプト王と呼ばれる。しかし、彼は蛇と呼ばれながらも、蛇の数秘術はメシアの数価と同じである。<sup>16</sup> [……] 見よ、この大いなる蛇の力を。それは聖なる蛇の外殻なのである。<sup>17</sup>

メシアの靈魂が単に悪を制圧したわけでもなければ、翻然と悪に魂を売り渡したわけでもないことをナタン言葉から読み取らねばならない。メシアの靈魂の本質は、数秘術で蛇とメシアの数価が等しいという秘密を発見したことによって裏付けられる。神の光さえも届かず、悪が跳梁する「大いなる深淵」に生まれたメシアの靈魂は、存在論的な観点から見ても蛇の特性を備えていたのである。「聖なる蛇の外殻」という撞着表現は、善悪を超脱するメシアの本質を的確に表しているのである。

メシア棄教後の証言のなかで、ナタンはツヴィの靈魂にカインに遡る系譜を見出して、次のように述べたと伝えられる。

ラビ・ナタンは次のように説いた。[……] 清浄空間の下部は外殻の棲家である。その場所を修復するために、メシア王は外殻の奥深くまで降りて行く必要がある。それゆえ、彼は悪魔たちの王と呼ばれる。彼ら〔外殻〕を制圧し、修復し、支配するからである。[……] カインとアベルは（最初の人間から生まれた）二人の息子であり、第六要素〔<sup>ティフエレット</sup>壮麗のスフィラー〕とメシア王である。清浄空間の下部はメシア王が修復するであろう。[……] したがって、カインこそがメシア王なのである。<sup>18</sup>

この逆説的な発想は『大蛇論』の主張と合致する。悪を制圧するために地獄降りの使命を担うツヴィは、「悪魔たちの王」の異名をとる。しかも、カインの靈魂の生まれ変わりと見做されている点は興味深い。弟のアベルを殺めて人類の歴史で最初の殺人者となったカインは、しばしば蛇との不浄な関係

を指摘される。<sup>19</sup> 引用した証言からは、この世界の悪を修復するという崇高な救済行為のために、メシアが本質的に悪との強い親和性を持つことが明示されているのである。

しかしながら、我々はこの発想が必ずしもナタンの独創ではないことを知っておく必要がある。シャブタイ派思想を始め、当時のカバラーに強烈な影響を与えたルーリア派のカバラー、とりわけハイム・ヴィタルの著作には、すでに善と悪の親和性が蛇の象徴とともに暗示される。<sup>20</sup> そもそも 13 世紀に興ったヘローナ・プロヴァンス盛期のカバリストたちが悪の起源を神の内部に求めて以来、善悪は単純な対蹠的構造として理解されることはなかった。<sup>21</sup> 16 世紀半ばに著されながらルーリア派のカバラーとは直接的な関係をもたない『神秘顕現の書』<sup>ガリヤ・ラザ</sup>では、<sup>22</sup>『<sup>ギル・グール</sup>霊魂転生論』のなかで善と悪が不即不離の関係を結んでいることが強調された。それでも、蛇を媒介してメシアの両義性が語られる点で、様々な象徴が幅輻するナタンの『大蛇論』にヴィタルが多大な影響を及ぼしたことは十分に想定できる。

蛇とメシアの關係に伏在する秘密が語られるのは、ヴィタルが『<sup>23</sup>霊魂転生の書』と『<sup>24</sup>霊魂転生の門』においてである。彼は特にカインの靈魂とアベルの靈魂を歴史のなかで善悪の様相をつかさどる淵源として重視した。すなわち、善悪の知識の樹の実を食べた最初の人間の罪によって生まれた二人を、<sup>25</sup>『<sup>26</sup>霊魂転生の系譜』における最初の分岐点と見做したのである。このとき、神の属性を表す 10 個のスフィロートのうち、善と悪を最も端的に明示するふたつが彼らの性質として割り当てられる。羊飼いのアベルは慈愛の<sup>27</sup>スフィラーで表される。それに対して、土を耕すカインは神の峻厳なる裁きを意味し、悪を生成したとされる厳正の<sup>28</sup>スフィラーと同一視される。

カインとアベルは<sup>29</sup>慈愛と厳正のふたつの様相である。彼らには世界のあらゆる靈魂が備わっており、靈魂のすべて、あるいはほとんどが、<sup>30</sup>ほかならぬ慈愛と厳正に由来する。

ヴィタルが注目するのはカインの靈魂である。それまでのアガダーでは、カインが蛇の不浄を持って生まれ、残酷な方法でアベルを殺したことが強調された。ところが、そのカインがカバラーが説く世界の位階構造の最上位に位置する発散世界と密接な関係をもっていると主張するのである。

カインがいかにして発散（世界）の魂魄を得ることができるのかと驚いてはならない。『光輝（の書）』ではカインは蛇の穢れであると言われている。だが、（最初の）人間はすべての被造物のなかで選ばれて神が創造したもので、そこにはすべての靈魂が備わっており、カインはその長子であることを知っておかねばならない。（カインが）すべての子供たちよりも偉大な長子であることは明白である。<sup>25</sup>

こうして、穢れた蛇に喩えられるカインの潜在的な聖性を指摘すると、ヴィタルは靈魂転生の系譜を精緻に解き明かしながら、その穢れが修復される世代について語る。それはユダヤ教のメシア伝承で、真のメシアの代名詞でもあるダヴィデの世代である。

再びダヴィデの父エッサイに転生したとき、カインの様相では完全に修復がなされた。「ナハシュの娘アビガルのところへ行った」<sup>26</sup>とあるように、彼は蛇<sup>ナハシュ</sup>と呼ばれた。ラビたちは「娘は蛇に唆されて死んだ」<sup>27</sup>と言っている。（しかし、）これはエッサイがカインの魂魄に混在していた蛇のすべての穢れを修復し尽くしたことを暗示している。<sup>28</sup>

ヴィタルはここで矛盾を疑われる聖書の記述に対して、タルムードのラビたちの説明とは異なる独自の解釈を施している。歴代誌上 2:16 でエッサイの娘であつたはずのアビガイルが、サムエル記下 17:25 では「ナハシュの娘アビガル」と書かれている。アビガイルとアビガルを同一の女と考えたラビたちは、彼女が蛇に唆されて死んだことを意味すると解釈した。ところが、ヴィタルはこの変更を反対方向に解釈する。つまり、「ナハシュの娘アビガ

ル」がエッサイの娘となったのである。蛇を意味するナハシュという名の男がエッサイと呼ばれるようになったことは、「カインの魂魄に混在していた蛇」が完全に修復されたことを意味しているというわけである。

エッサイによる「カインの様相」の修復によって、カインが「すべての子供たちよりも偉大な長子である」ことが確認された。それまで蛇に喩えら続けたカインは長子権を回復し、ヴィタルによれば、それに伴って贖いに向けた価値の転倒も生じる。

修復されると、カインがアベルよりもますます大きくなるであろう。この証拠は銀よりも金の価値が高まるところにある。[……]金は厳正で、銀は慈愛である。<sup>29</sup>

贖いのために不可欠な靈魂の修復によってカインの罪が消滅すると、最初の人間の長子としての潜在性が発揮されてカインがアベルを凌駕する。そのことを、ここでは、ユダヤ文学の伝統で銀に劣るとされた金が優越することに喩えている。すなわち、修復された「カインの様相」を備える者は、慈愛のスフィラーと厳正のスフィラーの価値を反転させるのである。通常は、神の厳正が消失すれば、贖いが訪れると考えられているが、<sup>30</sup>ヴィタルはメシアの靈魂の逆説的な性格から、厳正のスフィラーの増大が贖いをもたらすという結論を導き出した。この発想の転換がナタンによるメシアの靈魂の逆説的な記述の基盤になっただけでなく、<sup>31</sup>世界循環期論などに現れる反規範主義的思想にも決定的な影響を及ぼしたと想定することはまったく妥当である。次章で明らかにするように、ヴィタルはカインの靈魂を継承していると自覚していた。しかし、彼は決して自ら戒律に抵触する行為に及ぶことなどなかった。それに対して、ナタンはツヴィの<sup>マアスィーム・ザリーム</sup>奇妙な行動や双極的な心理状態をメシアの特性として認め、悪との強い親和性を積極的に彼のなかに見出したのである。

### 3. メシアの靈魂の系譜と正統性

最初の人間の靈魂が地上に散逸して転生を繰り返していることを考えれば、シャブタイ・ツヴィに宿るメシアの靈魂が<sup>ギルグール</sup>靈魂転生の系譜に突然現れたわけではないことは容易に理解できる。実際に、ガザのナタンは『大蛇論』<sup>タニニム</sup>のなかでメシアの靈魂の両義性について説きながら、カインの靈魂との関係に言及していたのであった。ただし、メシアの靈魂を詳細に規定したのに比べると、靈魂転生の系譜を語るナタンの言葉は、その意図を理解するために決して充分とは言えない。それでも、我々はナタンが多くを負ったハイム・ヴィタルの教義に目を向けることで、ツヴィが靈魂転生の系譜のなかに占める位置をかなり正確に知ることができる。本章ではヴィタルとの対比によって、複数形で表現される「メシアの踵の靈魂」とかつてバル・コホバとラビ・アキバに宿ったメシアの靈魂というふたつの論点を提示し、ナタンが靈魂転生論によって主張したツヴィの正統性を論じる。

ナタンは『大蛇論』の冒頭で、メシアの靈魂の源泉に関して次のような不可解な言葉を残している。このなかで我々が注目するのは、ミシュナに由来する「メシアの踵」という言葉である。「メシアの踵とともに、尊大が増加し、<sup>32</sup>威厳が<sup>32</sup>圧倒する」という言葉は、メシア来臨に際して様々な悪しき先触れが現れるという文脈のなかに見出される。

ラビたちが言うには、イスラエルが離散から解放されるまでは、神も<sup>シェヒナ</sup>臨在も（離散から）出ていくことはないと言われた。ゆえに、次のように言われている。「彼らのあらゆる苦しみを彼は背負っている」。<sup>33</sup>すなわち、もし罪がなく贖いが訪れるならば、メシア王の根源であるメシアの踵の靈魂が世界を訪れる前に、（神と臨在が離散から出ていく）ということである。ところが、メシアの踵の靈魂が訪れ始めてからも、<sup>34</sup>時が来て自らを修復する者が現れるまで（臨在は）離散のなかに遅滞していた。メシア王がそれ〔臨在〕を修復したことによって、すでに修復されたかのように見える。というのも、すべて（の靈魂）は（メシア王の）

根源に由来するからである。彼が離散から出ていったことによって、すべて（の靈魂）が出ていったかのように見える。[……] 以前の世界循環期（が過ぎ去って）以来、すでに木曜日の行いに安息日の聖性が増し加わっている。そして、その世界循環期<sup>シユミタエ</sup>以来、まるで金曜日のように、木曜日の行いに安息日の聖性が始まっているのである。[……]（もはや）臨在は離散の状態にない。[……] 臨在の離散を嘆き悲しむべきではないのである。<sup>35</sup>

ローマ軍によってエルサレムの第二神殿が破壊されて以来、神の女性的属性である臨在のスフィラーは、神自身との調和を失って地上の塵埃に埋もれてしまった。『光輝<sup>ゾーハル</sup>の書』の主要人物として知られるシムオン・バル・ヨハイの言葉によると、臨在はイスラエルの民が異邦の隷属状態にあるとき、エジプトでもバビロニアでも常に人々の間にあった。そして、贖いのときには神と臨在はイスラエルとともに戻って来る。<sup>36</sup> この箇所ではナタンが依拠する伝承によると、メシア来臨に先行して、ユダヤ人が悔い改めて贖われると同時に、神と臨在が調和を回復することになっている。ところが、ツヴィが現れたこの時代には、「メシア王の根源であるメシアの踵の靈魂」がすでに地上に顕現している。このことによって、実際には必ずしも贖いを実感できないとしても、ナタンは「（もはや）臨在は離散の状態にない」と明言するのである。新しい世界循環期が訪れようとし、贖いの過程はメシアの時代を象徴する安息日の段階に接近している。ツファット盛期のカバリストたちは「深夜の修復」や「レハー・ドディー」の朗詠のなかで、臨在を夫から引き離された花嫁に喩えて不遇を嘆いてきた。それは聖地を追われた離散のユダヤ人の運命そのものである。しかし、ナタンは「臨在の離散を嘆き悲しむべきではない」と、新しい時代の到来を告げたのである。

ここに現れる「メシアの踵の靈魂」がツヴィの靈魂を指していることは間違いない。カインの靈魂との関係は明らかにされないが、それは今やツヴィの身体に宿って、長く待たれた臨在の修復を実現したのである。さらに、「メシアの踵の靈魂」が複数形で書かれていることにも注意が必要であ

る。ナタンは、メシアだけでなく、すべての信者の靈魂が同じ根源に由来すると述べていると思われる。次の言葉には、このことがいくぶん詳しく説明されている。メシアの靈魂がバル・コホバとラビ・アキバに遡る靈魂転生の系譜に連なることに加えて、ツヴィの時代の人々がメシアと同じ靈魂の根源を持つことが明言される。

メシアの踵のあらゆる靈魂が意味するところは、足の踵<sup>アケヴ</sup>だけでなく、ひとつひとつの身体部位<sup>アケヴ</sup>の末端であるということを知っておかねばならない。足の踵に由来する者はその世代において高慢であり、その他の部位の末端に属する者は、ラビ・アキバのように素晴らしい至高の靈魂を持つ。彼は左腕の末端に由来し、自らの靈魂と段階を高く上げた。その靈魂はヨセフの子のメシアである。ヤロブアムが罪を犯したときにそこから出てきた者であり、末端の様相に由来する者である。それゆえ、彼はヨセフの子のメシアなのである。また、バル・コホバはダヴィデの子のメシアの靈魂を持っていた。ラビたちが言うには、(ローマ軍が投石機を使ってバル・コホバの) 足に向かって石を投げた。それはメシアの踵の靈魂の秘密によって天上で行われた素晴らしい修復<sup>ティツクーン</sup>である。[……] これらの靈魂は 1675 年に訪れ始め、素晴らしい知恵にたどりついて、彼らはメシア王の世代の者となる。すなわち、彼と同じ根源を持つ者となるのである。同じ世代の人々を高めたモーセのように、同じ時代から来たすべての者たちはここに到達することになる。<sup>38</sup>

「メシアの踵の靈魂」は、この文書が書かれた 10 年後の 1675 年に人々の身体に宿り始め、「メシアの王の世代の者となる」。モーセに率いられたイスラエルの民が指導者の気高きのゆえに嘉せられたように、ツヴィと同じ時代に生きる信者は「素晴らしい知恵」を得て贖われるのである。かなり多くの人々が「メシアの踵の靈魂」という特殊な属性を備えていると言われているように見えるが、実際にメシアに準ずるある種の特権的な性質によって特徴づけられるのはメシアを信じる者に限られている。

また、ナタンは一般的に踵と解される言葉を足だけでなく、他の身体部位に適用する。その際に言及されるのが、2 世紀にローマ軍との戦闘で奮迅したバル・コホバと彼をメシア王として称揚したラビ・アキバである。占領下に置かれたユダヤ民族の独立を勝ち取るために立ち上がったバル・コホバは、ラビ文学の伝承において、単なる戦士としてだけでなく、志半ばに倒れたメシアとして描かれることがある。ナタンはこの伝承を踏まえているのである。「左腕の末端」の靈魂の系譜に属するとされるラビ・アキバは、真のメシアが現れる終末に先だって自己犠牲的な死を遂げるとされるヨセフの子のメシアの靈魂を持つ。それに対して、バル・コホバには潜在的にダヴィデの子のメシアの靈魂が内在していた。聖書で悪を形容して用いられる「その世代において高慢」な者とは、時代ごとに現れるメシアの靈魂を指している。バル・コホバが「巨大な石を片脚で受け止めると、それを投げつけて幾人もの人々を殺戮した」<sup>41</sup>というミドラシュの伝承に基づいて、ナタンは邪悪な踵の靈魂を持つツヴィが「素晴らしい修復」を行うことを予言しているのである。

以上がナタンの語る靈魂転生論である。『大蛇論』以外の文書でも、これ以上まとまった記述を発見することはできず、我々はここから彼が意図したところを探り出さねばならない。そこで再びヴィタルの『靈魂転生の書』や『靈魂転生の門』と比較しながら、ナタンの論拠と独自性を指摘する。すでに確認していたように、その際、ふたつの論点が挙げられる。ひとつは「メシアの踵の靈魂」という言葉の意味とその複数性である。そして、もうひとつがバル・コホバとラビ・アキバの靈魂が邪悪なメシアの靈魂と関連付けられる根拠である。

足の踵あるいは身体の末端の靈魂については、すでにヴィタルが自身の靈魂と関連付けて多くのことを語っている。それが彼の自負したメシアの靈魂であることは言うまでもない。そして、ここでも最初の人間から分岐したカインの靈魂とアベルの靈魂が解説の糸口となる。

カインとアベルは最初の人間の両肩である。アベルは右肩にあり、カインは左肩にある。[……] さて、カインの根源だけは明らかにしておこう。

私、ハイムの魂魄の閃光はそこから来ている。カインの根源は（最初の人間の）腕と胴体を結ぶ左肩の部分である。[……] 確かに私の魂魄の閃光の根源は、この様相の左の末端である。<sup>42</sup>

前章で述べたように、カインの靈魂は悪の性質を孕みながらも、修復を経るなかで増長してアベルを上回る。スフィロート体系のなかで左側に位置する<sup>グッラー</sup>厳正のスフィラーが右側の慈愛のスフィラーを凌駕して、メシアによる贖いの時代が到来するという発想に一致している。ヴィタルは自らの「魂魄の閃光」がカインの左肩の末端に由来しているとし、その靈魂はカインからエリヤ、エゼキエル、ラビ・アキバといった義人たちの身体を経由して自らに転生してきたことを随所で繰り返して確認する。この文脈で足の踵が関連付けられることはないが、別の箇所では足は最も修復が困難な場所として言及される。<sup>43</sup>

臨在の離散の神秘についてよく理解しておかねばならない。神殿が破壊された日から、[……] ベリアルのアダムの外殻の間に落下したすべての靈魂を、その頭から両足まで集める仕事が終わらなければ、すなわち、（最終的に）両足まで落ちたものを集め終わらなければ、メシアが顕現することはないし、イスラエルが贖われることもないのである。<sup>44</sup>

ベリアルのアダムは、最初の人間の靈魂が分裂して地上に散逸したときの対応物としてしばしば現れる。この両足まで修復を終えない限り、メシアによる贖いがもたらされることはない。おそらく、ナタンはこの発想を最初の人間の末端に由来する靈魂が備える優れた性質に結びつけたのであろう。

それに加えて、ヴィタルの教義には、信者がツヴィと同じ「メシアの踵の靈魂」に属しているというナタンの考え方に類似した共同性を発見することもできる。彼はイツハク・ルーリアの教えの唯一の継承者であることを正当化するために、他の弟子たちが自分を介して同じカインの根源に由来すると述べている。<sup>45</sup>しかし、ナタンの場合は信者の贖いを保証することによってメ

シアの時代が間近に迫っていることを告知している点で、共同性を主張する目的が大きく異なっている。後者の特徴は、彼らにメシアと同じ特権的な靈魂に属することを明かし、来るべきメシアの時代を約束したことにあった。

こうしたナタンの考え方は、バル・コホバとラビ・アキバをめぐる言説のなかにも隠されている。ヴィタルのより丁寧な記述を参照し、我々はナタンの意図を推定することができる。靈魂が存在する場所に従って、ヴィタルは以下のように三つの分類を提示する。そもそも最初の人間の身体に含まれることがなかった靈魂は、「完全に新しい靈魂」と呼ばれる。善悪の知識の樹の実を食べたことで、ほとんどの靈魂が地上に崩落することになるが、そのときにわずかに原初の人間の身体に残った靈魂が「ある程度新しい靈魂」であり、ここからカインとアベルが生まれる。そして、困難な修復を抱えたまま延々と靈魂転生を繰り返すのが、地上のほとんどすべての人々に宿る「古い靈魂」である。前章の内容から判断できるように、メシアの靈魂は「ある程度新しい靈魂」に由来する。ヴィタルの靈魂転生論の多くが、このカインとアベルの系譜をめぐる緻密な記述であり、なかでもカインの靈魂が重視された。ツヴィイがカインの靈魂の系譜の末端に位置するというナタンの主張は、ヴィタルのそれを踏襲したものであった。

カインを開始点とするメシアの靈魂の系譜のなかで、ナタンにとってもヴィタルにとっても重要な人物であったのが、バル・コホバとラビ・アキバである。ヴィタルはユダの三男シェラに転生したカインの「ある程度新しい靈魂」をバル・コホバとラビ・アキバが継承したことを明らかにしたうえで<sup>47</sup>、前者がメシアと目されていてながら、贖いをもたらしることができなかった理由を説明して次のように述べる。

もしその世代がふさわしいのならば、彼が何者であるかが明らかにされるであろう。だが、もしそうでなければ、バル・コホバの時代のラビ・アキバに起こったように、彼は死んでしまうか、神の御名の聖別 [殉死] によって殺されるであろう。[……] しかしながら、もしイスラエルがふさわしければ贖い、あるいはその世代に徳を授け、あるいは闇を歩んで

いるならば律法を教えるために、すべての世代に彼は転生してくるのである。<sup>48</sup>

言い換えるならば、メシアの靈魂が転生していたはずのバル・コホバとラビ・アキバがメシアとして民族を贖うことができなかったのは、彼らに責任があるのではなく、同時代の人々が救済に値しなかったからである。だが、ヴィタルによれば、結果としてラビ・アキバはメシアについて誤った予言をしてしまったことになる。

3人の人物が終末について誤ったことを言った。ひとは我らの父祖ヤコブである。彼が息子たちに「集まりなさい。最後の日にお前たちに起こることを伝えておこう」<sup>49</sup>と言ったとき、終末は逃げて行ってしまった。ふたりめは預言者サムエルである。彼は誤ってエリアブのことを「主の前でメシアとなるものである」<sup>50</sup>と言った。ラビ・アキバは誤ってバル・コホバを主のメシアであると考えた。(確かに)ヤコブの文字はアキバであるが、これは彼らと同じ間違いである。それゆえ、3人はこの誤りを修復するために転生したのであった。<sup>51</sup>

ラビ・アキバが犯した虚言の罪によって再び転生を余儀なくされたカインの靈魂は、その後ヴィタルの身体に宿ることになる。彼は自身のなかにメシアの潜在性を備えた靈魂が内在していると考えたのである。決して声高に宣言することはなかったとしても、彼の言葉からメシアとしての自覚を読み取ることは難しくない。

私はカインの罪のために傷を負った自らの魂魄、霊、靈魂を完成させる必要がある。[……]私の魂魄は他の誰よりもラビ・アキバの魂魄の閃光に近く、それゆえに誰よりも私とともに転生しているのである。[……]我が師はヒゼキヤの霊とラビ・アキバの霊が私についているのをご覧になった。<sup>52</sup>

ヒゼキヤ王こそがメシアであったというラビ・ヒレルの見解がタルムードのなかに現れることを想起すれば、ヴィタルがルーリアの言葉によってメシアとしての自らの正統性を暗示していることは間違いない。彼がヨセフの子のメシアとしての自覚を抱いていたことは、様々な箇所から知ることができるのである。<sup>53</sup><sup>54</sup><sup>55</sup>

メシアの靈魂は「ある程度新しい靈魂」としてカインからラビ・アキバを経てヴィタル自身に転生した。しかしながら、ヴィタルはバル・コホバの靈魂についてはそれほど詳細な説明を残していない。ラビ・アキバがヨセフの子のメシアの系譜に位置づけられるならば、バル・コホバが真正の終末をもたらすダヴィデの子のメシアの靈魂を継承していることは容易に推測できる。それでも、自らのなかにバル・コホバから転生してきた靈魂を見出すこともなければ、ルーリアに帰することもしない。この事実はヴィタルがメシアや終末よりも、戒律遵守と祈祷を通して靈魂の修復を目指す人々の精神的な努力を重視したからに他ならない。ツファットのメシア論が過激化しなかったのは、このような贖いへ向けた人間の努力に対する期待が充実し、終末の緊張感が均衡状態を維持していたからである。だが、ナタンがツヴィをバル・コホバの生まれ変わり、すなわちダヴィデの子のメシアとして宣揚したとき、すべてはひとりの男に託され、この均衡状態が崩壊したのである。『大蛇論』が著された直後、ツヴィはイスラームに改宗した。それ以降のナタンの論考のなかで贖いが先延ばしされ、新たな時代の到来の緊急性が後退したのは、彼がメシアの靈魂の特権的な性格を強調してしまっていたからにほかならない。のちのハシディズムに見られるような靈魂転生論の大衆化とは反対に、ナタンの靈魂転生論には拭いがたいメシア中心主義が色濃く反映されていたのである。

#### 4. 結論

『<sup>タニニーム</sup>大蛇論』が著された 1665 年に、シャブタイ・ツヴィが実際に改宗することがあらかじめ予定されていたとは考えにくい。あるいは、メシアと悪の

親和性は認知されていたとしても、この直後の顛末を知る我々は、ガザのナタンが描述したメシアの靈魂の性質が奇しくも現実のツヴィの行動と一致していたことに驚かざるを得ない。善悪の境界を超脱する両義性を生得的に備えたツヴィがイスラームに改宗したとき、カインと蛇の關係を通してメシアと悪が類縁關係にあることを強調してきたナタンは、矛盾と挫折によって生じた空隙を滑らかに架橋することができたのである。しかも、ツヴィに宿る靈魂はなんの脈絡もなくこの世界に現れたわけではない。ハイム・ヴィタルはカインの靈魂をラビ・アキバから自分自身へと連なる系譜として描き、そこにヨセフの子のメシアとしての働きを見出したが、最後の一線を踏み越えることはなかった。それに対して、ナタンはカインの靈魂がバル・コホバからツヴィへ転生してきたことを明らかにし、贖いが目前に迫り来ていることを人々に告知した。ナタンの<sup>ゾル・グーエル</sup>靈魂転生論は、ツヴィの正統化の論理として、あるいは奇妙な行動へのアポロギアとして展開されたのである。

メシア棄教後にナタンが著したカバラー論考のなかでは、<sup>シュミット・ト</sup>世界循環期論や生命の樹と死の樹のモチーフによる時代の遷移が主題となることが多い。例えば『燭台論』では、<sup>メノラー</sup>律法が時代的なパラダイムの同義語として提示された。すなわち、メシアによって贖われた世界を支配する新しい律法を想定するとき、シナイ山でモーセに与えられた律法は相対的に価値の低いものと見做される。現行のモーセ律法の時代がツヴィの顕現によって終端に達すると、新しいメシア律法の時代を迎えるのである。ツヴィが改宗したことは、既存の価値観が転倒する新しい世界の法則に合致している。のちに展開されるこうした言説のなかで、靈魂転生論が表立って出てくることはない。それでも、メシアの靈魂の系譜に確固とした位置づけを得て、しかも本質的に悪との親和性を指摘されたことは棄教後の教義に矛盾なく一致しているのである。

ルーリア派のカバラーが及ぼした広範な影響のなかで、ユダヤ人のアイデンティティと救済について論じ、あるいはひとりひとりが戒律に従って生きることの重要性を説く思想として、17-18世紀の靈魂転生論はユダヤ人の生き方を説明する論拠となりつつあった。そうした靈魂転生論の大衆化が始まる時期に、ナタンは敢えてツヴィの存在理由を解明する目的でこの教義を展

開したのである。信者の間に存在するメシアの靈魂との共同的な紐帯が説かれたことも事実であるが、メシア棄教以降のシャブタイ派に特有の孤立状態と優越意識のためにナタンの靈魂転生論が時代の思潮となることはなかったのである。

#### ■ 註

- 1 拙稿、「カバラの靈魂転生論に見られる一六—一七世紀のユダヤ人の精神的状況：ツファットとアムステルダム事例」、『宗教研究』84(1)14-20 頁。
- 2 エジプトのカバリスト、ラファエル・ヨセフに宛てられた書簡であると見られる。  
גרשם שלום, בעקבות משיח, עמ' יב.
- 3 ゲルショム・ショーレムは、不定期的に繰り返す感情の起伏やそれによって知性の減退が生じない点に着目して躁鬱病であると判断している。  
גרשם שלום, שבתי צבי כרך א, עמ' 102-110.
- 4 創世記 1:2。
- 5 בראשית רבה, ב, ד.
- 6 創世記 1:2。814 年という数字は 814 である。
- 7 ヨブ記 38:8。
- 8 שלום, בעקבות משיח, עמ' יז.
- 9 創世記 1:2。
- 10 イザヤ書 27:1 を参照。雌雄の蛇が悪魔の権化として描かれる例は珍しくない。  
Gershom Scholem, Kabbalah, pp.387-388.
- 11 これはラビの伝承としては一般的である。特に以下を参照。ב. סוטה כה ע"ב.
- 12 出エジプト記 9:20。
- 13 メシア来臨の条件のなかに、すべてのユダヤ人が贖いに値することが条件であるとする見解はタルムードに現れる。  
תלמוד בבלי, סנהדרין צח ע"א.
- 14 שלום, בעקבות משיח, עמ' כ-כא.
- 15 פריעהは語根 פ-ר-עに連想させる。
- 16 出エジプト記 32:25。355 年という数字は 355 で等しい。  
שלום, בעקבות משיח, עמ' כ.
- 17 ישעיה תשבי, אגרת רבי מאיר. 1771 年による記録。
- 18 אברהם אבינו רבינו, חקרי קבלה ושלוחותיה כרך ב, עמ' 287.

- 145 (218)

- (やまもと・しんいち 東京大学大学院人文社会研究科博士課程)

## The Doctrine of Metempsychosis in the Sabbatean Kabbalah

Shinichi Yamamoto

The doctrine of metempsychosis, or the transmigration of human souls, originates from the earliest stage of kabbalah and developed over centuries. It became more popular at the end of the sixteenth century in Lurianic kabbalah. According to Hayyim Vital, a salient advocate of Isaac Luria, human beings were to keep commandments or ascetic customs in order that their souls might be restored. The concept was based on the idea that the souls contained in the First Adam's body had been scattered and fallen down on the earth because of his original sin in Garden of Eden. It was necessary not only for the kabbalists but for every pious man to mend their souls.

Nathan of Gaza, a prophet and propagandist of the Sabbatean movement, adopted the doctrine of metempsychosis in his kabbalah. His main purposes were to identify Sabbatai Tzevi with a great serpent, Pharaoh and Cain whose roots were regarded evil, and to justify Sabbatai Tzevi as a messiah by tracing the lineage of the messianic soul. Vital's doctrine on the soul from Cain inspired Nathan to create his idiosyncratic messiology: The messianic soul has both an evil disposition and a holy root. In this paper, "The Treatise of the Dragons" Nathan authored in 1665 before Sabbatai Tzevi converted to Islam is to be mainly focused on, referring to Vital's "The Book of Metempsychosis" and "The Gate of Metempsychosis".

The key point of the argument here is twofold: Primarily, the messianic souls, in accordance with Nathan's doctrine, had a bipolar feature in that they originated from Cain, who was associated with the demonic serpent, though their

supreme mission was supposed to be the redemption of the people. However, it is the double-faced messiah who could descend into the depth of the evil realm and restore the souls stuck there. Secondly, 'the messianic soul from the heels' of the First Adam is the herald of redemption. The lower the souls from his body is, the harder it will be to restore them. This soul reincarnated the body of Sabbatai Tzevi via a two-century heroic and messianic figure Bar Kokhoba. Thus Nathan justified Sabbatai Tzevi as a true messiah.